

〈迷惑〉意識の類型：

『おだやかな死』における〈迷惑〉の用例分析を通じて

田中菜摘^{*1}

**Types of feelings of "Meiwaku/Burden": Through the analysis of examples of
"Meiwaku/Burden" in *Une mort très douce***

Natsumi TANAKA^{*1}

Abstract - In contemporary Japan, the elderly often say that they do not wish to be a burden on anyone, and they make important decisions with this motivation (here called feelings of "Meiwaku/Burden"). This paper seeks to categorize feelings of "Meiwaku/Burden" according to its relationship to the type of motivation they express. For this purpose, we focused on feelings of "Meiwaku/Burden" of elderly people in France. As there is no easily corresponding phrase in French for our word "Meiwaku/Burden", the French use several different words to express this sense "Meiwaku/Burden". Here we draw examples from *Une mort très douce* by Simone de Beauvoir, as well as her *La Cérémonie des adieux*.

The analysis of examples given in these books indicates that "Meiwaku/Burden" of the elderly is motivated by three factors: relationships (déranger), emotions (ennuyer), and body/physical (gêner). In this paper, according to these three motivations we categorize feelings of "Meiwaku/Burden" three types: the feelings of "Meiwaku/Burden" about relationships, the feelings of "Meiwaku/Burden" about emotions, and the feelings of "Meiwaku/Burden" about bodily/physical things.

Keywords : Meiwaku, burden, elderly people, French, analysis of example

1. はじめに

日本の高齢者は「迷惑をかけたくない」と口にする
ことが多く、こうした言動が、高齢者の生活スタイルや終
活において重要な役割を果たすこともある¹。にもか
かわらず、高齢者が抱く〈迷惑〉をかけたくないという意

識（以下、〈迷惑〉意識と表記）が、誰に対して、ある
いは何について働いているのかということを明確にする
のは難しい。なぜなら、〈迷惑〉意識がはっきりと表明
されている場合でも、その意識内容を伝えるはずの「迷
惑」という語があまりにも広義で曖昧だからだ²。した

¹ 「迷惑」と高齢者の意識に関する研究としては、諸岡
(2019) や大島 (2014) が挙げられる。諸岡 (2019) は終活
のノウハウ本に、「迷惑をかけない」というキーワードが散り
ばめられていることを取り上げ、「迷惑をかける」ことに対す
る不安が高齢者の死生観に入り込んできていることを指摘して
いる (28 頁)。どのように死を迎えたいかということを高齢者
が考える際に、「迷惑をかけない死」が重要なキーワードにな

っていることは、大島 (2014) でも諸岡 (2017) でも指摘され
ている。

² 諸岡 (2019) は「「迷惑」観念は、負担の内容や範囲を曖
昧にすることにより「図らずも」「心ならずも」という心情を
ニュアンスとして伝える」(32 頁) と言い、「迷惑」は、本人の
意図や想定を超えた責任や結果をも含んでいると言う。そうで
あるならば、「迷惑」は、自他ともにその意味が確定できない

*1: 岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科

*1: Graduate School of Interdisciplinary Science and Engineering
in Health Systems, Okayama University

がって、「迷惑をかけたくない」という言葉の内実は、他者への気遣いや拒否の婉曲表現、あるいは尊厳ある自立への願いや、高齢者の自己否定感など、様々に解釈される幅をもつ³。このことは、〈迷惑〉意識を抱く高齢者とその周囲との行き違いの原因になったり、高齢者が自分自身の心情を適切に言語化するのを困難にしたりといった問題にも発展するため、高齢者への最適なケアの提供を妨げる恐れがあるのではないだろうか。

こうした問題を回避すべく、本稿では〈迷惑〉意識を類型化する。より具体的には、高齢者の〈迷惑〉意識が何によって駆り立てられているのか、という動機付けの観点からその類型化をおこなう。これまで、「迷惑」という語に対する日本語学的なアプローチや、老年心理学、または社会学などからのアプローチは行われてきた⁴。しかし、それらは「迷惑」および〈迷惑〉意識が、何を意味しているのか、何を表明しているのかという視点からなされたものが多く、先述のような解釈のバリエーションを示すにとどまっていると言える。それゆえ、本稿では、こうしたバリエーションを類型化するために、〈迷惑〉意識の動機付けに着目した。この類型が示せれば、〈迷惑〉意識の研究に、新たな視座を提供することができる。また、ケアの現場においても、高齢者が〈迷惑〉意識を抱き、それを表明するとき、どういうことに焦点が当たっているのかということについて、自他ともに見当をつけやすくなる。そうなれば、関係者間でのピントの合ったやり取りに一役買うことができるだろう。

〈迷惑〉意識を類型化するために、本稿ではフランス人高齢者の〈迷惑〉意識に着目した。なぜなら、フランス語には、日本語の〈迷惑〉と完全に合致するような広義の語がなく、フランス人は幾つかの語によって自身の

〈迷惑〉意識を表現し分けているからである。例えば、日本の「迷惑」として訳出できる語として、後に詳しくみるような「déranger」「ennuyer」「gêner」「encombrer」が挙げられる。こうしたフランス人の用法に着目することは、日本人の多様で広義な〈迷惑〉意識を整理する際に役立つと思われる。しかしながら、日本人高齢者の〈迷惑〉意識を、海外との比較によっておこなう研究はまだ少ない⁵。この背景には、〈迷惑〉意識を日本特有のものとする認識があると考えられる⁶。しかし、それならばなおさら、海外との比較研究を通じて、その相違点と共通点を明らかにすることが重要だ。本稿の目的である〈迷惑〉意識の類型化は、その足掛かりとなるだろう。

そこで、〈迷惑〉意識がまさに動機付けられている場面を分析するためには、背景や心理の描写を多く含むエッセイや小説を参照するのがふさわしいと思われる。これらのことから、本稿はそうした場面の用例を、シモーヌ・ド・ボーヴォワールによる『おだやかな死 (Une mort très douce)』(1964年刊行)において分析した。さらに、用例を補うため、同じくボーヴォワールが著した『別れの儀式 (La Cérémonie des adieux)』(1981年刊行)も補助的に使用した。前者は、ボーヴォワールが実母を看取ったときの記録であり、後者はサルトルを看取るまでの約10年間を記した生活記録である。「老い」という現象を哲学的なアプローチから考察した後年の大著、『老い』(1970年刊行)を著したボーヴォワールが、近親者と自身の老いを見つめながら書いたこれらのテキストは、高齢者の意識構造を探るうえで注目すべき点が多い⁷。

本稿におけるこうした問題関心のもと『おだやかな死』を読み解いてみると、「迷惑」と翻訳者によって訳

ことが重要である場面さえあると言えるだろう。また、大島(2014)も、メッセージの曖昧化を日本人のコミュニケーションの特徴とする遠慮・察しコミュニケーションの理論を引きながら、「「迷惑」という表現の曖昧さが、かえって有効に利用された円滑なコミュニケーションとなっている」と指摘している(118頁)。

³ 「迷惑施設」等、被害の受け手が使う「迷惑」と、主に高齢者が言う「迷惑をかけたくない」等の被害を出す側が使う「迷惑」とに、「迷惑」を大別した大島(2014)は、高齢者の意識の背景には、他者への遠慮や気遣いのみならず、拒否の婉曲表現や「排除の対象になりたくないという心情」(124頁)があるのではないかとしている。

⁴ こうした研究史は、複数の研究分野を横断しながら〈迷惑〉意識の研究史を整理した本村(2020)においてまとめられている。そこでは、〈迷惑〉意識は、ポックリ信仰に関する老年心理学の研究から「尊厳ある自立した生き方」として、そこに近代産業社会という背景を加味した社会学の研究から「老人

の抱く自己否定感」として理解されている。また、「自立」から〈迷惑〉意識を切り込み「「頼る」=「迷惑」」の図式を示した社会学の成果なども紹介されている(37-38頁)。

⁵ 中国語との比較研究として、近藤ら(2008)が挙げられる。また本村(2020)も、要介護者が介護者に対して抱く「自己負担感」に注目したSPB(Self-Perceived Burden)の研究動向を取り上げ、日本人の〈迷惑〉意識を研究するうえで重要な視座であるとしている。

⁶ 日本文化に特徴的な「世間」「恥」「和」などから高齢者の〈迷惑〉意識を読み解く研究動向については、本村(2020)の39頁、および注10に詳しい。

⁷ とはいえ、高齢者の〈迷惑〉意識を探究するという観点から、これら2つのテキストを扱った研究は国内外とも管見の限りなかった。ただし、『おだやかな死』における「死」や「老い」に対する記述を1人称と2人称に分類し、それを時系列でまとめて、『老い』の記述とパラフレーズさせながら解釈した研究として、前原(2013)がある。

出されている言葉と、「迷惑」と訳しうると判断された言葉を、合わせて4つ(déranger, ennuyer, gêner, encombrer)抽出することができた。本論で詳しく論じるように、これらが使われている用例を分析してみると、高齢者の抱く〈迷惑〉意識が、〈人間関係(déranger)〉、〈心情(ennuyer)〉、〈身体・物理(gêner/encombrer)〉の3つによって動機付けられていることが明らかになる。本稿では、そのそれぞれによって動機付けられている〈迷惑〉意識を、〈人間関係の迷惑〉意識、〈心情的迷惑〉意識、〈身体的・物理的迷惑〉意識と呼ぶ。

そこで、本稿ではまず、動機付けが3つに類別可能であることを明らかにする(第2節)。そのために、「déranger」「ennuyer」「gêner」「encombrer」の辞書的な意味を確認し(2.1)、それぞれの使われ方の違いを用例分析によって明らかにすることで、3つの類型化が可能であることを示す(2.2)。そのうえで、この3つの動機付けをそれぞれの用例を分析することでより明確にしていく(第3節)。

本稿は、〈迷惑〉意識が何に動機付けられているのかを明らかにするために、〈迷惑〉という語が使われている場面を分析する。したがって、これは〈迷惑〉という語の意味を明らかにする言語的・概念的な分析ではないし、テキストの文学的解釈を目指すものでもない。

2. 〈人間関係の迷惑〉意識、〈心情的迷惑〉意識、〈身体的・物理的迷惑〉意識

本節では、〈迷惑〉意識が何に動機付けられているかに応じて、〈迷惑〉意識を、〈人間関係の迷惑〉意識、〈心情的迷惑〉意識、〈身体的・物理的迷惑〉意識、これら3つに分類できることを示す。そのために、まず『おだやかな死』から抽出された4つの〈迷惑〉に関する語(déranger, ennuyer, gêner, encombrer)の辞書的な意味を確認する。この際、フランス人が使う仏語辞典(*Trésor de la Langue Française informatisé*, 以下、TLFiと表記)を軸に、日本人が使う仏和辞典(『ロベール仏和大辞典』)からも参照した。そのうえで、これらの語が使われている場面の用例分析をおこない、そこから3つの類型を提示するという手順を踏む。後述するが、「encombrer」は用法の近さから「gêner」に含め、類型は3つとした。

2.1 基軸となる3語の辞書的意味の確認

déranger

TLFiで「déranger」を引いてみると、対象が(A)無生物の場合は、(A-1)「整えられているものを動かすこと」、(A-2)「適切な機能、状態、または通常の経過を乱すこと」とあり、対象が(B)人や生物の場合は、(B-

1)「何らかの不快感をもたらすことで駆り立てたり動かしたりすること」、(B-2)「仕事を乱したり、邪魔したりすること」とあった。

また、仏和辞典には、①…の活動[休息]を妨げる、…を邪魔する、…に迷惑をかける、②(整頓された物、場所)を乱す、散らかす、③(計画、習慣など)を狂わせる、乱す、④(精神)を錯乱させる；(健康)を損ねる、⑤(社会通念など)に反する；を混乱[一変]させる、⑥《古》…を墮落させる、とある。

こうした辞書的な意味から、「déranger」の「déranger: 整っていること(ranger)を除去する(dé)」というコアイメージが読み取れる。したがって、「迷惑をかける」という仏和辞典の訳語は、この「物や人の整っている状態を散らかす、乱す」というコアイメージから派生していると分かる。「人を乱す」とは、(B-2)にある例文「Si je déränge, je puis très bien revenir à un autre moment, quand vous voudrez (もしお邪魔でしたら、あなたのいい時にまた来ます)」のような事態を指す。

ennuyer

TLFiで「ennuyer」を引くと、近代的な意味として(A)倦怠感、疲労感を抱かせること、(B)不愉快な思いをさせること、と出てくる。

仏和辞典にも、①…を退屈させる、②…を困らせる、…に迷惑をかける、嫌気を起こさせる；心配させる、…の気をもませる、③《古》〔非人称構文で〕…には…するのがつらい、④《古》…を苦しめる、いらだたせる：に嫌悪感を抱かせる、と訳出されている。つまり、「ennuyer」は、相手にマイナスな感じや気持ちを抱かせることと紐づいている。

gêner

TLFiには、(A)「邪魔をすること、苦しめること」とあり、(A-1)誰かに物理的または物質的な不快感を与えること、(A-2)誰かの活動や何かの機能に対して障害となるもの、邪魔なものを構成すること、(A-3)(誰かに)戸惑いを感じさせる、恥ずかしそうな表情をする、(その人に)不快な思いをさせる、とある。

仏和辞典を引くと、①(肉体的に)…を窮屈にする、不快[不自由]にする、苦しませる、うっとうしくさせる、②…を妨げる、…の邪魔になる、③…に気詰まりを感じさせる、嫌な思いをさせる；にはありがた迷惑である、④…を(金銭上)困らせる、⑤《古》…を拷問にかける；ひどく苦しめる、と書かれている。

辞書的な意味をみれば、「gêner」が主に身体や物体に関わる迷惑や不快感を表すときに用いられると分かる。

「恥ずかしそうな表情をする」とあるので、「ennuyer」

と似ているようにも思うが、これはあくまで「表情」という身体表現から読み取られている。

encombrer

これを TLFi で引くと、(A) 困らせるほど過剰に占有すること、妨害すること、量や数によって困惑の原因となること、(B) 過剰に侵入すること、物質的（富、健康）、道徳的、知的、精神的な観点から、困らせること、とある。

仏和辞典でも、①（場所を）ふさぐ、混雑させる、②（人が）…を…でいっぱいにする、に…を詰め込む、③（物が）…の邪魔〔迷惑〕になる、④（人が）…を…でうんざりさせる、悩ます、とある。

これら辞書的な意味からは、ある種の過剰さが読み取れる。また (A) (B) とともにその説明に「gêner」が使われていることから、「encombrer」は「gêner」にある種の過剰さを加えたいときに使われるのではないかと考えられる。

以上のように、辞書的な意味を確認した。こうした辞書的な意味は、語のイメージをつかむのに役立つが、これに照らしただけでは、〈迷惑〉意識を分類するための基準を明確にすることができない。そこで、次節から、これらの語が実際に使われている用例の分析に入る。

2.2 『おだやかな死』における用例の分析

ここでは、「déranger」「ennuyer」「gêner」の3つの語が一挙に登場する用例と、「encombrer」の用例を順に分析し、それぞれの使われ方を比較しながら、類型の違いを明確にしていこう。

引用する前に述べておくが、これから先で引用する8つの用例の中には、「迷惑」という訳語があてられていない場合もある。しかし、本稿では、すべての該当箇所を「迷惑」と訳しても意味が大きく歪曲されることはないという点を重視して考察をすすめる。もちろん「邪魔になる」と「いやじゃない？」等という日本語の字義通りの違いをまったく無視することはできないかもしれないが、これらも「迷惑」という広義の言葉に含むことができるだろう。

用例（1）：déranger・ennuyer・gêner を含む用例

原文を引用した後、邦訳を併記する。下線は筆者によるものである（以下の用例においても同様）。

«Mais ça n'ennuiera pas Lionel que je reste longtemps ? — Bien sûr que non. — Oui, là-bas, je ne vous dérangerai pas. A Scharrachbergen c'était trop petit, je vous gênerai.» (p. 32)

「しかし、そんなに長くいるのは、リオネルさんにはいやじゃないかね (ennuyer) ?」——「そんなことあるものですか。」——「そうね、向こうへ行ったら、邪魔にならないように (déranger) するけれど、シャラッハベルゲンでは、家が狭すぎて、邪魔 (gêner) だったわね。」(68 頁)

この用例（1）は、ボーヴォワールの母による発話である。自宅で転倒して骨折した母（77 歳）は、その後の入院先で癌と診断される。しかし、生きることに強く執着する母に、ボーヴォワールは最期まで癌を告知しないと決めていた。癌の治療はもはや困難で、母の死期は迫っていたが、腹膜炎の症状を緩和するために医師は母に開腹手術を施した。この発話は、開腹手術をした後の母の気をまぎらわせるために、ボーヴォワールと妹が退院後を想定した色々な計画を母に話している一幕での、母の応答である。

「リオネルさん」とはボーヴォワールの妹の夫（母にとっては次女の婿）であり、母は退院後、妹夫婦（母にとっては次女夫婦）の家で静養しようという話になっていた。したがって母の滞在は期間が決まっているわけではなく、長くなる可能性も大いにあるので、「そんなに長くいるのは、リオネルさんにはいや (ennuyer) じゃないかね？」という発話は、同居することになるリオネルを気遣うものだと考えていい。

では、何を気遣っているのだろうか。ここでは、母がリオネルの心情を気遣っていると考えられる。いくら義理の母とはいえ、長い滞在となれば、一緒に住み慣れていないリオネルの気持ちも変化し、自分の存在が心理的なストレスになりはしないかと、母は先回りして心配しているのである。したがって、ここでの母の〈迷惑〉意識は、自分のせいで、リオネルにマイナスの〈心情〉を抱かせたくないということによって動機付けられていると分析できる。これは、まさに〈心情的迷惑〉意識である。

しかし、次の発話では「ennuyer」ではなく「déranger」が選ばれており、その直接目的語として「vous」が示されている。「vous」とは、距離のある相手に対する場合や、丁寧な言い方をする場合に使われる2人称であり、親しい友人や家族間で使われる「tu」とは区別されるため、これが娘たちをさすとは考えにくい。では、この場合の「vous」とは、誰をさすのか。話の流れと、「vous」が複数形としても使用できることから、この「vous」は次女夫婦であると判断できる。そうだとすると、母はリオネルの〈心情〉（リオネルが自分

をどう思うのか)に関心をよせ、「そんなことあるものですか」と否定されたので、今度は自分と次女夫婦との〈人間関係〉(自分と次女夫婦との関係はどうなるのか)に焦点をうつしていることが分かる。つまり、母における〈迷惑〉意識の動機付けが、リオネルに嫌な気持ちを抱かせたくないという〈心情〉へのフォーカスから、次女夫婦との関係を悪化させたくないという〈人間関係〉へと移行しているのである。

したがって、「*déranger*」が使われた「向こうへ行ったら、迷惑(*déranger*)にならないようにするわ」という発話は、母自身と次女夫婦との今までの関係をできるだけ乱したくないという母の意思表示でもあると解釈できる。つまり、ここには、周囲の〈人間関係〉に動機付けられた〈人間関係の迷惑〉意識があらわれていると言える。同居を快諾するくらいなのだから、母と次女夫婦との関係は今のところ良好だと判断できる。とはいえ、怪我や手術で健康状態の悪化した母との同居という状況は、今回が初めてだ。つまり、今回の同居は、次女夫婦との関係を良くも悪くもし得る。すなわち、「*déranger*」を選んだ母の前には、次女夫婦との関係が不確定な状態で横たわっているのである。このように、〈人間関係の迷惑〉意識は、周囲との、とりわけ不確定な〈人間関係〉に動機付けられている。

では、その次の「シャラッハベルゲンでは、家が狭すぎて、迷惑(*gêner*)だったわね」という箇所はどう分析できるだろうか。「迷惑(*gêner*)」も、直接目的語として「vous」が示されており、これも次女夫婦をさすと考えていい。さらに、この「迷惑(*gêner*)」はその内実が説明されている。つまり、母は「家が狭すぎて」、次女夫婦に迷惑だったと言っているのだ。したがって、この「迷惑(*gêner*)」は、物理的な話の流れに準じていると解釈でき、ここに〈身体的・物理的迷惑〉意識をみとめることができる。確かに、人が一人増えれば、その人が占めるスペース分だけ共用空間は狭くなる。これをどう捉えるのかは人や状況によるが、物理的に共用空間が狭くなることに変わりはない。これは不確定な〈人間関係〉に動機付けられる「迷惑(*déranger*)」とは異なる。

このように、「*déranger*」「*ennuyer*」「*gêner*」の3つが登場する用例を分析することで、それぞれの違いを、動機付けの違いによって明らかにすることができた。

用例(2): *encombrant* の用例

Ces intrusions *encombrantes*, ces accès d'importance, étaient pour elle des revanches : elle n'avait pas souvent l'occasion de s'affirmer. (p. 25)

こうしたひとに迷惑をかける出しゃばり、自分をえらく見せたい衝動は、母にとっては、埋め合わせの一種だった。(54頁)

この箇所は、ボーヴォワールによる母についての記述であり、除け者にされまいとする母による娘たちへの支配的な関わりを思い返すエピソードの一節である。ここには、姉妹が友達を自宅に招いて遊んでいるときに、歓迎されていないと知りながらその輪に闖入し「私には権利があります」と居座り続けた母の姿が描写されている。つまり、その場にそぐわない母の身体的存在が、無用な過剰さとしてボーヴォワールの眼には映っていたということが、彼女に「*encombrante*」(「*encombrer*」の現在分詞で形容詞として用いられる)を選ばせたと言える。

このように「*encombrer*」は、物理的に過剰な現象に起因して選ばれていることが読み取れる。用例(2)は杉沢で「迷惑」と訳出されているため取り上げたが、本稿の分類においては「*gêner*」に含めることとした。

以上のように、本節ではフランス語の用例を分析することで、〈迷惑〉意識がその動機付けにより、〈人間関係の迷惑〉意識、〈心情的迷惑〉意識、〈身体的・物理的迷惑〉意識の3つに類型化できることを明らかにした。ただ、比較的にその動機が明確な〈心情的迷惑〉意識と〈身体的・物理的迷惑〉意識に比べ、〈人間関係の迷惑〉意識を動機付ける〈人間関係〉がどのようなことを指すかが分かりにくい。この点をふまえ、次節では「*déranger*」「*ennuyer*」「*gêner*」の用例をそれぞれ個々に取り上げ、3つの類型をさらに明確にしていこう。

3. 3つの類型それぞれの分析

本節では、〈人間関係の迷惑〉意識、〈心情的迷惑〉意識、〈身体的・物理的迷惑〉意識、それぞれを動機付ける〈人間関係〉、〈心情〉、〈身体・物理〉がどのようなものなのかをより明確にしていこう。より具体的に言えば、〈人間関係〉とは不確定な人間関係、〈心情〉とは相手の不快感やマイナス感情、〈身体・物理〉とは相手に与える身体的あるいは物理的な負担に、それぞれ焦点が当たっていることを示す。そのために、以下では各類型の基軸となる3語それぞれの用例を個別に分析する。ただし、「*ennuyer*」と「*gêner*」に関しては『おだやかな死』のなかに適切なものがなかったため、『別れの儀式』における用例を使用した。

3.1 〈人間関係の迷惑〉意識 — *déranger* の用例分析

ここでは、『おだやかな死』から「*déranger*」の用例を2つ取り上げる。これらの分析を通して、〈人間関係の迷惑〉意識を動機付ける〈人間関係〉がどのようなものなのか、より詳しく把握していこう。

用例 (3) : *déranger* の用例①

« Elle avait l'air si confuse de *déranger*, si éperdument reconnaissante de ce qu'on faisait pour elle: elle fendait le coeur », m'a dit Olga le soir. (p. 4)

「お母さんは迷惑をかけたと言って恐縮して、ちょっとさし上げたことに対しておろおろ感謝していらっしゃるの、見ていてこちらの胸が痛くなってしまいました。」と、その晩、オルガは私に言った。(11 頁)

これは、オルガとボーヴォワールが、ボーヴォワールの母について話している一幕での、オルガの発話である。杉沢では「お母さんは迷惑をかけたと言って恐縮して」とあるが、原文をよく見てみると、ここは「お母さんは迷惑をかけたと恐縮した様子で」と訳出するべきだろう。また、この「*déranger*」は、目的語が明らかな場合に省略される絶対用法で用いられている。そのため、「迷惑をかけた」対象は文脈から推測するしかないが、その後に続くエピソードがオルガとのものであることから、この「*déranger*」の対象はオルガ自身であると考えられる。したがって、この用例 (3) は、オルガが母の様子に「*déranger*」を感じ取って胸が痛くなったという場面なのである。

オルガとは、ボーヴォワールの昔からの友人であり、母とも親しくしている人物である。彼女の恋人のポストがボーヴォワールの母と同じ建物に住んでいるため、母が自宅で転倒し、救急搬送された際にも、オルガとポストは手助けしてくれていた。搬送後も、オルガは、病院に母の身の回りの物を届けたりして、サポートを続けていた。母はそのことに深く感謝しているのだが、その様子がオルガには「胸が痛く」なるようなものとして映っている。

ここだけを見ると、母を思いやる自分の気持ちが母本人にうまく伝わっていないか、あるいは信じられていないと感じて、オルガが胸を痛めているようにも読めるが、そうではない。この用例 (3) のすぐ前の箇所に注目してみよう。「母が礼を言うと、オルガは「だって、それは愛情のためですわ。」と答えた。母は夢みるような感じ入った様子で、何度もくり返した。「オルガは言いましたよ、愛情のためですって。」」(11 頁) という記述である。これを素直に受けとるなら、母とオルガの間には、オルガの親切が「愛情のため」によるものだという共通理解があったことになる。すなわち、オルガの気持ちは、母本人との対話によって直接伝えられており、母もそれを受け取っているのである。もちろん、それでも母がオルガの「愛情のため」という発言を信じていないと考えることもできるが、直接的なやり取りによっ

て、オルガが自分の気持ちを伝えたことは確かである。それに、「夢みるように」くり返す母の様子をみれば、オルガの発言を彼女がかなりの程度信じていると考えた方が妥当だろう。

にもかかわらず、オルガに「迷惑をかけた (*déranger*)」という印象を抱かせる母の様子は、母とオルガとの個人的な〈人間関係〉の変化に動機付けられてなされたと考えられる。転倒という予期せぬことが起こり、母の方は以前よりも身体的に弱って入院してしまったが、オルガの方には何の変化もない。この自分へのみ訪れた突然の変化によって、オルガとの関係を一方的に乱してしまった、歪めてしまったという感覚が、ボーヴォワールの母にはあると思われる。つまり、母の方にだけ、オルガとの対等な友人関係が変わってしまったという感覚があるのである。以前と同じ友人関係ではなくなったのなら、何が迷惑で何が迷惑でないかという線引きも以前と同じようにはいかないと感じられるはずだ。つまり、以前であれば「愛情のため」というオルガの言葉で済んだはずのやりとりが、それでは済まなくなっているのである。しかもこの〈人間関係〉の変化、歪みが、母の方にのみ訪れているという点をより重視する必要がある。なぜなら、オルガとボーヴォワールの母の間でのこうした認識のズレが、〈人間関係的迷惑〉意識を動機付ける不確定な〈人間関係〉をもたらす一因になるからだ。

この関係に対する認識のズレは、母の大袈裟な感謝が、母自身の病状に対する過剰な不安に起因しているとオルガが予測していることから読み取れる。というのも、用例 (3) に続く箇所に、母のかかりつけ医が入院先へ来ないことに、オルガが腹を立てているシーンがある。オルガは、緊急入院した母を力づけるために入院先へ来てほしいと、かかりつけ医に電話でお願いしていたのである。この行動は、母の「迷惑をかけたと恐縮した様子」の緩和にかかりつけ医が貢献できるとオルガが考えていたことを示している。しかし、母本人がかかりつけ医に言及した箇所はみあたらないことから、オルガの考えは的外れだったと言える。

つまり、母の過剰な感謝が何に動機付けられているのかということが、オルガとボーヴォワールの母の間でズレているのである。オルガはそれを母自身の病状への不安の表れと考えている。一方で、ボーヴォワールの母にとってそれは、オルガとの対等な友人関係の不本意な変化によって動機付けられている。つまり、母のおろおろした感謝の様子は、〈人間関係的迷惑〉意識の表れなのである。しかも、両者ともこのズレにはっきりとは気が付いておらず、このことがどこかピントの合っていない二人のやり取りを助長している。

このように考察すると、〈人間関係的迷惑〉意識を動機付ける不確定な〈人間関係〉とは、今や母にとって不確定なものになってしまった（以前は整っていたはずの）オルガとの関係ということになる。以前は「友人」と素朴に呼べていた関係は、母の病状悪化により今や何と名づければいいのか分からないくらい不確定なものになってしまった。そのため、この現状を何とかしようという暗中模索が、オルガに対する大袈裟な感謝を母に引き起こしたと考えられる。迷惑ではないと一応は理解しながらも、オルガを前にすると「déranger」と言表したくなるような行動をとってしまう母の意識は、相手との不確定な〈人間関係〉によって動機付けられているのではないだろうか。

このような問いを立てて、用例（４）をみていこう。

用例（４）：déranger の用例②

« Il faudra envoyer des fleurs à la doctoresse Lacroix. » Je promis de m'en charger. « Et les agents ? est-ce qu'il ne faut pas leur donner quelque chose ? Je les ai dérangés. » J'eus du mal à la dissuader. (p. 8)

「女医のラクロワさんに花でもとどけなくちゃ。」私はその通りにしておきますと約束した。
「警官はどうかしら？何かあげなくてもいいかね？迷惑をかけたのだから。」そんなことしなくてもいいと納得させるのにずいぶん骨が折れた。（20 頁）

用例（４）の発話は、ボーヴォワールの母によるものである。また、「女医のラクロワさん」は、母と同じアパートに住む人で、母の転倒騒動にたまたま居合わせたために、いろいろと手を貸してくれた人物である。したがって、そうした事情を知るボーヴォワールも彼女へ返礼したいという母の意見に賛同している。しかし、警官にまで「迷惑をかけた」と言って返礼しようとする母には、ボーヴォワールが反対したというのがこの用例（４）である。

ここでのボーヴォワールと母のやり取りには、両者における〈迷惑〉の境界線の違いが明確に表れている。母は、自分の転倒事故に巻き込んでしまった人たちに「迷惑をかけた」と感じており、返礼したがっている。一方、ボーヴォワールはラクロワには返礼が必要だが、警官には不必要だと考えている。それは、ラクロワが自発的な協力として駆けつけてくれたのに対し、警官は通報があったためにその職務の一環として来ただけだからだ。また、ラクロワが、これからも付き合いの続く可能性のある隣人であるのに対し、警官との個人的な付き合いは今後もないということから、この返礼は、乱してし

まった〈人間関係〉の修復という意味合いも含むと考えられる。

では、オルガはどうだったのか。先にみたオルガに対しては、そもそも返礼の話が出ていない。これは、三者（オルガ、ラクロワ、警官）と母との関係性に由来すると考えられる。普段から友人としての交流があったオルガ、隣人としての交流しかないラクロワ、初めて会った警官、この三者三様の関係性において、返礼が必要な「déranger」の対象になったのは、母においてはラクロワと警官、ボーヴォワールにとってはラクロワのみということになる。この境界線のズレを、ボーヴォワールが自分の基準に合わせて是正したことから、母における返礼が必要な「déranger」の範囲が（少なくともボーヴォワールにとっては）無用に広がっていることが分かる。こうした範囲の拡大から、オルガとの関係のみならず、自分の転倒事故によって周囲との〈人間関係〉が変化し、母の中での〈迷惑〉の境界線が曖昧になっていることが読み取れる。では、オルガへの返礼の話が出ないのはどういうことなのか。用例（４）の分析から用例（３）を振り返ってみよう。

オルガに対して両者とも返礼の必要を感じていないのは、オルガが、母ともボーヴォワールとも「友人」と呼べるような親しい間柄だったからだろう。つまり、この安定した関係には、今回のような騒動があっても、オルガの愛情が変わることはないという信頼が寄せられていたはずだった。つまり、そもそも修復の必要などない関係だったのだ。だから、本来ならオルガは「déranger」の対象でも返礼の対象でもないはずだった。にもかかわらず、母は「déranger」と言表できるような様子で大袈裟に感謝する。この様子を胸を痛めたと言うオルガには、「déranger」を選びながらも、そうであってほしくないのに、という相反する思いが隠れていると考えられる。

オルガにとって、母との友人関係は確実なものであり、今回の手助けなどで乱されるようなものではないのに、母はオルガとの友人関係を乱してしまった、あるいは歪めてしまったと感じている。つまり、「déranger」という言表を心を痛めながら選んだオルガの選択に、オルガと母の互いに対する〈人間関係〉の認識のズレがあらわれている。このように分析すると、用例（４）において「déranger」を選んだ（用例（３）においては選ばれた）ボーヴォワールの母が、自分が不確定にしてしまった相手との〈人間関係〉に動機付けられていることが分かる。

「déranger」が、こうした不確定な〈人間関係〉に動機付けられているのは、他の用例においても同様である。例えば「父の死後、母は私たちにかかるようになって

た時、私たちに対しても同じような遠慮 (le même scrupule) を、私たちの迷惑 (déranger) になるまいという態度を見せるようになった」(54 頁) という用例がある。これは、かつての母を回想するボーヴォワールの記述である。この用例の後で、ボーヴォワールは母のことを「自分の中をはっきり見ることに、自分自身の判断を行使することにも、母は慣れていなかった。何かの権威のかげにかくれることが母には必要だった」(57-58 頁) と分析している。「何かの権威」を必要とする母は、方々に恋人をつくって自分をないがしろにする夫に激高しながらも、最期まで夫を権威として頼っていた。そんな夫の死後、母に必要な権威は、娘であるボーヴォワールへとスライドしていく。かつては支配していた娘を、今度は自分の権威とする。この用例は、そうした〈人間関係〉の過渡期にあった母についての記述である。ここでも、やはり「déranger」が、不確定になった娘との〈人間関係〉を押し量るような母の態度の記述として採用されている。

このように「déranger」の用例を分析することで、〈人間関係的迷惑〉意識が、話している相手や周囲との不確定な〈人間関係〉に動機付けられていることが明らかになった。用例においてみてきたように、ボーヴォワールの母のような、自分をとりまく〈人間関係〉に応じて、自分の評価や相手との距離感をはかるようなふるまいをする人と「déranger」は相性がいいと言える。また〈人間関係的迷惑〉意識は、これが働いているとき、から回りするような不安定な心情を特徴としてもつが、この意識がフォーカスしているのはあくまで相手との関係がどうなるのか、ということである。この点で、次節でみていく〈心情〉にフォーカスし、それに動機付けられた〈心情的迷惑〉意識とは、明確に異なる。それでは、〈心情的迷惑〉意識を追っていかう。

3.2 〈心情的迷惑〉意識 — ennuyer の用例分析

ここでは、『別れの儀式 (La Cérémonie des adieux)』(1981 年刊行) から「ennuyer」の用例を 2 つ取り上げ、それらの分析を通して〈心情的迷惑〉意識を動機付ける〈心情〉をより詳しくみていく。

同書は、サルトルの病状が悪化する 1970 年から、彼が亡くなる 1980 年までを記したボーヴォワールによるサルトルとの生活記録である。

用例 (5) : ennuyer の用例①

Sartre a fait avec moi, à tout petits pas, d'assez longues promenades : «Ça ne vous ennuie pas d'avoir un petit compagnon qui marche si lentement?» m'a-t-

il demandé une fois. J'ai répondu non, avec sincérité. J'étais déjà assez heureuse qu'il marchât.
(p. 121)

サルトルは私と、ごく小刻みな足どりで、かなり長い散歩をした。「こんなにのろのろと歩く子供といっしょでは嫌じゃない？」と彼は一度私に訊ねた。私はそんなことはない、と心から答えた。彼が歩けるだけで、私はもう十分に幸福だった。(118 頁)

用例 (6) : ennuyer の用例②

Il ne voulait pas ennuyer les autres avec ses ennuis.
(p. 156)

彼〔サルトル〕は自分の苦しみで他人を苦しめることを欲しなかった。(154 頁)

用例 (5) は 1976 年春、サルトル 70 歳のときの発話である。論評を発表し、変わらず議論にも参加するサルトルは知的には好調のようだったが、ボーヴォワールからみれば「次々に着想が浮かぶというふうではなくなった」(117 頁) ように思われた。そのせいで以前よりも飲食に頓着し、「新しい事物になかなか適応しなかった。人から異を唱えられるのも、我慢できない。それで私は、過去の出来事について彼がひどい思い違いをしても、ほとんど一度も反論しなかった」(117 頁) と、ボーヴォワールは記している。そんな折、ヴェネチアへ出かけた先での一幕が用例 (5) である。普段は、ボーヴォワールの方がいろいろとサルトルを気遣っているのだが、それでも、彼女に嫌な思いを抱かせたくないという〈心情的迷惑〉意識がサルトルにはあったと読み取ることができる。

用例 (6) は 1980 年、74 歳で亡くなる直前のサルトルの様子を解釈したボーヴォワールの記述である。この用例 (6) には「ennuyer」の他に、その名詞形である「ennui」も含まれている。とはいえ、この名詞の方は、「迷惑」というよりも、訳出の通り、病状に起因するサルトル自身の「苦しみ」と考えた方がいい。これは、この用例の直前にある「何よりも一半失明になった当座を除いて一彼は自分の身に起きたことを、常に謙虚に耐えぬいてきたのだ」(154 頁) という記述からも明らかだ。なぜサルトルが自分の苦しみを「謙虚に耐えぬいてきた」のかといえば、それは、自分の苦しむ姿を見て苦しむ人たちがいるからだだろう。したがって、

「ennuyer」の対象となっている「他人 (les autres)」

は、サルトルの苦しみを間近で見る仲間たちのことであると考えていい。これは、すぐ後に続く「彼は自分の死の到来を、騒ぎ立てることなしに、自分を取りまく友情

や愛情に応えつつ、自分の過去に満足して、受入れたのである、「為すべきことはやった」(154 頁)という記述からも分かる。つまり、彼に無関係・無関心な人たちはこの用例における「ennuyer」の対象に含まれていない。これは、サルトルの〈心情的迷惑〉意識の対象が自分の仲間に限られていたことを示している。

このような考察から、用例(5)でサルトルが、ポーヴォワールに対し「déranger」ではなく「ennuyer」を使った背景がみえてくる。考えてみれば、ゆっくりとしか歩けなくなった自分に合わせて、長い散歩に付き合ってくれているポーヴォワールに対するサルトルの〈迷惑〉意識は、〈人間関係的迷惑〉意識であっても不自然ではない。つまり、ポーヴォワールの母が周囲の人たちに働かせたような、自分の変化した現状が互いのこれまでの〈人間関係〉を歪ませてしまうのではないかという動機付けが、サルトルに働いていたとしてもおかしくはないということだ。しかし、サルトルは「déranger」を選ばず、「ennuyer」を選んだ。この選択から、自分のままならない現状によってポーヴォワールとの関係が乱されることはない、というサルトルの思いを読み取ることができる。すなわち、用例(5)からは、サルトルがポーヴォワールとの〈人間関係〉へ寄せていた揺らぐことの無い信頼を知ることができるのである。とはいえ、たとえそのような強い信頼関係にあったとしても、サルトルは、自分のせいで大切な人が嫌な気持ちになってしまう事態は避けたいのだろう。彼の意識は、あくまで大切な人たちの〈心情〉へ向けられているのである。これは、用例(6)においても一貫している。

以上から、この用例(5)と(6)の分析によって、「ennuyer」を選んだサルトルの〈迷惑〉意識が、ポーヴォワールや仲間たちとの〈人間関係〉ではなく、彼らの〈心情〉にフォーカスしていたことが分かった。

3.3 〈身体的・物理的迷惑〉意識 — gêner の用例分析

続いて、ここでも『別れの儀式』から「gêner」の用例を引用し、それらを分析することによって〈身体的・物理的迷惑〉意識をより詳しく確認しよう。

用例(7): gêner の用例①

Seulement, à partir de soixante-dix ans, si vous persistez à vous mêler aux gens qui agissent, on vous transporte sur les lieux en bagnole avec une chaise pliante, vous êtes une gêne pour tout le monde et l'âge vous transforme en potiche. (p. 55)

ただ、七十歳を過ぎてもなお、行動する人びとの仲間に加わることを固執すれば、車か折り畳み椅子でその場所に連れて行ってもらふことになり、みんなに迷惑をかけるだろう。そして、

年齢が人を飾り物に変えてしまうだろう。(50 頁)

用例(8): gêner の用例②

Grâce à ses activités, Sartre était de nouveau heureux de vivre. Liliane lui a demandé un matin : « De dépendre des gens, ça ne te gêne pas trop? » Il a souri : « Non. Ça a même un petit côté agréable. - D'être chouchouté? - Oui. - Parce que tu sens qu'on t'aime ? - Oh, je le savais avant. Mais c'est agréable. (pp. 118-119)

諸々の活動のおかげで、サルトルはまた生きる喜びを味わっていた。ある朝リリアヌが彼に訊いた、「いろんな人の世話になることを、それほど重荷には感じないの?」彼は微笑して、「ちっとも。ちょっとは楽しい面さもあるよ」「ちやほやされるってこと?」「そう」「みんなが僕を愛してくれる、と感じるから?」「なあに、そんなことは前からわかっていたさ。でも楽しい」(114-115 頁)

用例(7)は1972年冬、サルトル68歳のときの発話である。毛派の活動家たちとの友情が自分を若返らせてくれると喜ぶ一方で、サルトルは自身の身体的な衰えから彼らと行動を共にできない現状を「たとえば、ぼくはデモの最後まで行くことができない。片足がもういうことをきかないからだ」(49 頁)と残念がっている。用例(7)はこれに続く。

用例(8)は1975年冬、サルトル70歳のときのやり取りである。「生きる喜びを味わっていた」とあるが、これは知的活動面でのことであり、身体的な状況は思わしくなかった。秋になった頃から転倒や昏倒を重ね、歩行や嚥下にも困難をきたし、視力も悪化の一途をたどっていた。「反射の自制がきかないために、彼はまたもや排泄の不始末を起こした。頭脳がまだしっかりしているのに、われわれを見放してしまうこの肉体とは、おぞましいものだ」(114 頁)とポーヴォワールが思うほど、サルトルの生活は他人の手を借りなくては成り立たなくなってきていた。そういう状況でのリリアヌとの対話が用例(8)である。

この2つの用例にも「ennuyer」と同様な対比がある。それは、サルトルが「gêner」を誰に対して使っているのかという点である。用例(7)の「みんなに迷惑がかかる」とあるなかの「みんな」とは「tout le monde」の訳である。この「monde」には、「世界、世間」という意味があり、さらに大勢の人が集まるデモや集会が話題になっていることから、この「みんな(tout le monde)」には、面識のない人たちも含まれていると考えていい。一方、用例(8)のなかの「いろんな人」は

「gens」の訳語である。「人々、人、人間」と訳される「gens」に「世界、世間」という意味がないことと、この場合の「世話」とは生活の介助や知的活動の手助けを示すことから、この「いろんな人」は、実際にサルトルの世話をしているごく親しい友人や仲間をさすと考えられる。すなわち、この「いろんな人」に面識のない人たちは含まれていない。

つまり、この「gêner」の2つの用例から、自分の仲間に対しては〈身体的・物理的迷惑〉意識を抱かない（「gêner」の対象ではない）が、仲間以外の人たちに対しては〈身体的・物理的迷惑〉意識を抱く場合がある（「gêner」の対象になる場合もある）という、晩年のサルトルの様子を伺い知ることができる。これは、仲間に対しては〈心情的迷惑〉意識を抱く（「ennuyer」の対象になる）が、仲間以外には〈心情的迷惑〉意識を抱かない場合もある（「ennuyer」の対象にならない場合もある）ことが分かった、用例（5）（6）における「ennuyer」の分析結果と、ちょうど逆である。こうした用例分析から、どの言葉を選ぶのかということに応じて、サルトルにおける〈迷惑〉意識の対象とその動機付けが切りかわっていることが明らかになった。

ちなみに、サルトルは同書において「déranger」を使っていない。この理由を考えるなら、「ennuyer」と「gêner」の用例分析によって明らかになった、彼自身のなかにある、自分の仲間とそれ以外の人たちという、個人的だが明確な線引きがヒントになるだろう。この線引きのおかげで、サルトルは不確定な〈人間関係〉に動機付けられることがなかったと考えられるからだ。そのために、彼は〈人間関係的迷惑〉意識を抱く必要がなかったのである。

では、「déranger」を使うボーヴォワールの母はどうだったのか最後に振り返ってみよう。よく読んでみると、ボーヴォワールの母は、娘二人に対してだけは「déranger」を使っていないのである⁸。用例（3）では、母がオルガを「déranger」の対象にした様子について論じたとし、その他にはリオネル、ラクロワ、警官がこの対象になっていたが、彼らはすべて、「母娘」という〈人間関係〉にはない人たちである。つまり、母にとって「母娘」という〈人間関係〉だけは、何があっても変わらない、確定的なものであったと考えられる。

要するに、サルトルが特殊な人生を送ったから〈人間関係的迷惑〉意識を抱く必要がなかったのではなく、誰であっても、何かの〈人間関係〉を確定的で不変的だと

信頼するなら、〈人間関係的迷惑〉意識が働かないこともあるということだ。これは、家族に介護されることを当然のことと捉えている人とそうでない人などの〈迷惑〉意識を比較する際に役立つかもしれない。

以上のように、本節では、用例（1）の分析で明らかにした〈迷惑〉意識の3つの類型における動機付けの内実をより具体的に確認してきた。用例（3）と（4）における「déranger」の用例分析によって、〈人間関係的迷惑〉意識を動機付ける〈人間関係〉が、本人をとりまく不確定な〈人間関係〉であると明らかにし、用例（5）と（6）における「ennuyer」の用例分析によって、〈心情的迷惑〉意識を動機付ける〈心情〉の内実を、自分が相手に与えるマイナスの心情（不快感、悲しみ、苦しみ等）だと明らかにした。また、用例（7）と（8）における「gêner」の用例分析によって、〈身体的・物理的迷惑〉意識を動機付ける〈身体・物理〉を、身体的あるいは物理的な世話や負担として明らかにした。

4. おわりに

これまで、フランス語の用例分析を通して、その動機付けに応じた3つの類型、すなわち〈人間関係的迷惑〉意識、〈心情的迷惑〉意識、〈身体的・物理的迷惑〉意識を、高齢者の〈迷惑〉意識における3つの類型として明らかにしてきた。

本稿が残した課題は、上述のフランス人高齢者における〈迷惑〉意識の類型を、日本人高齢者の〈迷惑〉意識の類型化に適用することである。その際に欠くことのできない手続きとして、次の2点がある。1つ目は、3つの類型に社会的な視点を加味することである。つまり、本稿の類型は、あくまで個人間でのやり取りにおける〈迷惑〉意識の類型化にしか適用できていない。社会的な観点を加えるためには、フランスや日本などその地域社会ごとの個人と社会との関係を考慮に入れながら、さらなる分析が必要であろう。2つ目は、本稿の類型を大枠としながら、〈迷惑〉意識をより細かく分類していくことである。例えば、不確定な〈人間関係〉にはどのような種類があるのか、高齢者が相手に抱かせたくないと思うマイナスな〈心情〉にはどのようなものがあるのか、介護の〈身体・物理〉的な負担はどこまでを含むのか、などである。さらには、こうした大枠を設定することで、この枠に収まらないものをあぶり出すこともできる。また、「負担をかけたくない」「面倒をかけたくない

⁸ 用例（1）で、母は次女夫婦のことを「déranger」の対象にしていたが、次女ひとりと夫婦単位では対象として異なると判断したため、こう結論付けた。

い」などの「迷惑をかけたくない」の内実と考えられている言葉を、本稿の3つの類型からより細かく仕分け直すことができるだろうし、そうすることは研究を深化させる一助となるはずだ。

上の課題に取り組むことで、高齢者の〈迷惑〉意識をより細かく、より明確に類型化できるようになれば、ケアの現場におけるより円滑なコミュニケーションに寄与できるのではないかと思われる。このようにして積み上げられる高齢者の〈迷惑〉意識を探る本プロジェクトは、国内だけに留まらない意義をもつことにもなるだろう。

参考文献

- [1] Simone de Beauvoir, *Une mort très douce*, Gallimard, 1964.
(杉捷夫訳『おだやかな死』, 紀伊国屋書店, 1995年)
- [2] Simone de Beauvoir, *La Cérémonie des adieux*, Gallimard, 1981. (朝吹三吉, 二宮フサ, 海老坂武訳『別れの儀式』, 人文書院, 1983年)
- [3] 諸岡 (2019): 諸岡了介「ケアと「迷惑」——なぜ今日の高齢者はこれほどに「迷惑」を口にするのか」, 本村昌文他 (編著)『古い 人文学・ケアの現場・老年学』, ポラーノ出版, 2019年, 25-42頁
- [4] 諸岡 (2017): 諸岡了介「死と「迷惑」—現代日本における死生観の実情—」, 『宗教と社会』第23号, 2017年, 79-94頁
- [5] 大島 (2014): 大島操「高齢者が「迷惑」と表現する状況に関する考察」, 『熊本大学社会文化研究』第12号, 2014年, 111-127頁
- [6] 本村 (2020): 本村昌文「日本における古い・看取り・死をめぐる「迷惑をかけたくない」意識に関する研究史素描」, 『老年人文研究』創刊号, 2020年, 35-46頁
- [7] 近藤ら (2008): 近藤明, 邢叶青「日本語の「迷惑」と中国語の「麻煩」の意味・用法の対照的考察」, 『金沢大学教育学部紀要』第57号, 2008年, 31-40頁
- [8] 前原 (2013): 前原なおみ「『おだやかな死』を再考する」, 『メタフュシカ』第44号, 2013年, 67-80頁
- [9] 『ロベール仏和大辞典』, 小学館, 1988年
- [10] 『ロワイヤル仏和中辞典』(第2版), 旺文社, 2005年
- [11] *Trésor de la Langue Française informatisé*, <http://www.atilf.fr/tlfi>, ATILF